重友毅 著

江戸の町人文學

オヂラ新書
(28)

ラヂオ新書

☆28

江戸の町人文學

重友毅著

昭和十五年十月十五日印刷
昭和十五年十月二十日發行

江戸の町人文學

定價五十錢

著者　重友毅

發行者　東京市芝區田村町一丁目テキストビル
株式會社　日本放送出版協會
和田利彦

印刷所　株式會社　日本放送出版協會印刷部

發行所　株式會社　日本放送出版協會
東京市芝區田村町一丁目テキストビル
振替東京四九七〇一番
電話銀座〇七〇七・六二六六番

發賣所
本社
大阪市東區北久太郎町二丁目黒川ビル
振替大阪五五九一一二番
電話船場三八九五番

關西支社
名古屋市西區御幸本町通四丁目
振替名古屋一九三三番
電話本局三五七番

中部支社
熊本市上通町三丁目
振替熊本三〇〇〇番
電話八九六番

九州支社

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertong

はしがき

昨年の暮、ラヂオで放送したのが緣となつて、この書をまとめることになりました。大體はその折の手控によりましたが、もとより新たに書き加へた部分も相當の分量に上ります。もともと一般の方々を相手に、お話したものですから今度もやはりそのつもりで筆を執りました。

そのつもりで筆を執つた以上、出來るだけ大勢の方に讀んで頂きたいと思ひまして、言ひ廻しもなるべくやさしいやうにと、心がけて行きました。それでも、どうかすると、堅苦しいことをいつてゐるかも知れません。また中には、あまり碎き過ぎて、まどろつこしいとお思ひの方もありませう。しかし多少の點は、どうか辛抱して讀んで頂きたいと思ひます。

言ひ廻しは出來るだけやさしくしたとは申しますものの、そのために內容まで引き下げたつもりは、少しもありません。それだけは、安心して頂いていゝと思ひます。

たゞ、お斷りしておかなければならないのは、都合で、非常に切り詰めた期間內に書き上げ

ましたので、文章がよく練れてゐないことです。いきほひ、説明の不十分な箇所も、ないとは申し兼ねます。しかし、大綱においては、あまりあやふやなことは、申してゐないつもりです『江戸の町人文學』と題しましたが、これは上方を中心に榮えた町人文學に對して、江戸中心のそれを指したものです。しかしこの二つのものは、全然切り離されたものではありませんから、その變遷推移の情況の分るやうに、その説明にも、相當の頁を割きました。

ともかくこれで、普通に「江戸文學」といはれてをるものの性格は、一通り御了解願へるものと、思つてをります。併せて、文學一般に對する見方についても、多少御參考になるふしもあらうかと、考へてをります。

若し、そのやうなことで、この書が讀者の方々の上に、何ほどでもお役に立つことがあるならば、著者としてこの上の喜びはありません。

昭和十五年八月十日

著者

目次

一、講述の目的……（一）
古典文學に描かれた時代特有の興味——興味の對象の轉移——興味のあり方を通じて見られる時代の生活の眞實相——過去の生き方と今日及び將來の生き方——視野の擴大とその深化——前進の糧としての古典文學の探究——その取扱ひ方——國民的見識の向上——新日本文化建設の基礎工作——專門家から一般人へ

二、俳諧の復興……（二四）
近世文學の町人化とその社會的原由——町人生活の停滯と文學の衰運
芭蕉以後——俳壇の墮落とその革新——與謝蕪村——古典趣味と支

那趣味――怪奇趣味と怪異の信仰――離俗說と現實の蔑視――復興俳諧の限界
小林一茶――逆境生活の詠出――所謂ひがみ根性とその深刻性――輕妙洒脫の句――俗語方言の濫用――現實の輕視

三、傳奇小說の發生……（六七）
西鶴以後――江島屋其磧――氣質物出現の意義――飜譯飜案文學の流行――近路行者――『英草紙』と『繁野話』――過渡期の作家上田秋成――薄倖の生涯と神祕的幻想――『雨月物語』――「吉備津の釜」における怪異描寫――怪談小說の最高峯――その出現の時代的必然性

四、傳奇小說の興隆……（九一）
怪談小說の後繼者――讀本（よみほん）――山東京傳――黃表紙・洒落本作者としての成功及びその理由――寛政の改革――手鎖事件――

—馬琴との交渉——馬琴作『高尾船字文』——『水滸傳』の飜案——建部綾足の『本朝水滸傳』——『忠臣水滸傳』——馬琴との競爭、確執——讀本作者としての失敗とその理由——讀本盛行の地盤開拓者としての功績——曲亭馬琴——讀本作者としての成功とその理由——『弓張月』と『八犬傳』——小說及び小說家の地位向上への寄與——讀本の盛行とその社會的意義——勸懲思想とその效用

讀本と合卷——柳亭種彥——『正本製』と『田舍源氏』——合卷と歌舞伎趣味——歌舞伎作者——正三・龜輔・五瓶・治助・南北・如皐・默阿彌

五、滑稽小說の特質……（一五五）

滑稽文學の先驅——雜俳——前句附——川柳——「穿ち」——狂歌——機智頓才——四方赤良（蜀山人）——眞顏・飯盛——黃表紙——洒落本——滑稽本——式亭三馬——『浮世風呂』と『浮世床』——常識

的見解と自然味の尊重——精細巧緻の寫生技巧——三馬の門流——人情本作者爲永春水——十返舍一九——『膝栗毛』——動作の滑稽と誇張——滑稽本の創始者としての功績——寫實小說としての滑稽本

六、國學と和歌……（一八九）

古典研究と和歌革新の叫び——荷田春滿——賀茂眞淵——荷田在滿——眞淵の門流——宗武・魚彥・千蔭・春海——本居宣長——『古事記傳』——平田篤胤——國學の四大人——國學者の復興和歌とその意義

歌人による歌壇の改革——小澤蘆庵——「たゞこと歌」の提唱とその歌風——上田秋成——香川景樹——「調べ」の說とその歌風——技巧的革新

幕末の歌人——僧良寬——井出曙覽——大隈言道——日常生活の詠出——和歌本來の使命への復歸

七、江戸文學の特性……（三二）
上方文學の衰退と文運の東遷——生活地盤の固定と文學の衰弱——國學の興隆とその影響——支那文學の盛行とその影響——表面的假裝による目先の變化——讀本と滑稽本——馬琴と三馬との反目——先行作品の踏襲と表現技巧の偏重——現實乖離の文學——時代の頽勢と作家の無自覺——作家作品の社會的待遇——勸懲思想による自己扮飾——反省資料としての江戸文學——現代文學の瞥見

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertong

江戸の町人文學

一　講述の目的

これから、江戸を中心として行はれました町人文學が、おほよそどんなものであつたかといふことについて、極く簡單に、その概略だけを、お話して行かうと思ひます。

その前に、何故こんな古い文學上のお話を、專門家でない、一般の方々に聞いて頂かなければならないか、また聞いて頂いて、そこに一應の理解をもつて頂くことが、一體どんな役に立つか、といふことについて、私見を申し述べて見たいと思ひます。

申すまでもなく、過去の文學作品といふものは、外ならぬ私どもの祖先の手によつて作られまた外ならぬ祖先によつて持て囃されて來たものであります。少くとも私どもが、今日過去の

文學作品として取り上げてをるほどのものは、いづれもさうした由緒のあるものばかりであります。もちろん、文學といふものは、何等かの意味で、興味のあるものでなくてはなりません。作者の方でも、何等かの興味に引かれて筆を執り、讀者の方でも、やはり同じ興味を感じるものだから、爭つてこれを手にするといふわけで、そこに共通の興味といふものがなければ、——たとへ多少の喰ひ違ひはあるにしましても、——文學作品は成立しませんし、よし成立しましても、あまり意義のあるものとはなり得ないだらうと思ひます。

そこで、興味とは申しましたが、興味にもいろ〳〵の段階がありまして、ほんの通り一遍の毒にも藥にもならないやうな、極く輕い意味、卑俗な意味での興味、たゞ面白可笑しいといふだけで通り過ぎるやうなものから、何か人生の深い意味を改めて考へさせ、生きて行くことの喜びを感じさせるといつたやうな意味での興味まで、さま〳〵のものを含んでゐるわけですがいづれにしましても、この興味を中心にして成り立つてゐるといふところに、文學作品のもつ重大な意義があると考へられるのであります。

ところで、かやうなことを申し出すと、或ひは不審に思はれる方があるかも知れませんが、

人々の興味の對象といふものは、時代によつて、それ〴〵に違ふものであります。もちろん、同じ日本人ですから、私どもの祖先が興味をもつたものと、現在の私どもが興味をもつてゐるものとは、大體において似通つてゐることは否定出來ません。しかし私どもの祖先が、それこそ腹を抱へて笑つたやうなことでも、現在の私どもにとつては、それほど可笑しくもないといつたやうなことは、多いことと思ひます。

それはつまり、同じ日本人であつても、時代によつて、各自の住む生活環境に違ひがあるからであります。早い話が、江戸時代のやうに、外國との交通が禁ぜられてゐた時代には、西洋風の人情風俗といつたものには、何人も殆ど全く馴染みがなく、假りにさういふものを描いた小説・繪畫・音樂の類に接したとしましても、恐らくは異樣な、時には薄氣味の惡いものとして受け取られたことでせうし、從つて一般の人々にとつて、それは恐らく、好奇心の對象とはなつても、快適な興味の對象とはなり得なかつたと思はれるのですが、今日のやうに、維新以來の西洋風の文化の氾濫中に生ひ育つた人々が多くなりますと、在來の日本風のものよりも、むしろ西洋風のものに興味をもつ者が少くはない、——殊に青年男女の間には、小説にしても

繪畫にしても、音樂にしても、西洋のものを喜ぶ者の方がむしろ多い、――といつた實狀によつても、そのことは察せられると思ひます。

これは極く大雜把な見方ですが、人の興味といふものは、大體このやうに、その人の置かれた周圍の事情によつて左右されがちのものであります。もつと詳しくいふならば、その人の置かれた社會の政治組織なり、經濟組織なりといつたものが、多かれ少なかれ、その興味の置きどころを決定する上に、微妙な關係をもつてをるといふことが、いへると思ふのであります。

もちろん、同じ社會に置かれましても、個人と個人との間には、その興味の對象にしましても、またその興味の向け方にしましても、多少の相違があることは免れません。しかし興味が右に考へたやうなものであるとすれば、個人的な相違は相違として、大體の傾向においては、一致するものと考へられるのであり、また甲の時代と乙の時代とでは、それ〴〵に傾向を異にするものであるといふことも、併せて考へられるのであります。

そこからして、今度は逆に、時代々々の人々の興味のあり方、――主にどういふものに興味の中心が向けられてゐるか、またその興味の向け方はどんな具合であるか、といふやうなこと

を問ひ詰めて行くことによつて、その時代の政治組織・經濟組織の中にあつて、人々はどのやうな生き方をしてゐたかといふことが、察せられる筈であります。人々は果して、滿足してゐたであらうか、それとも滿足してゐなかつたであらうか、若し滿足してゐたとしたら、それは十分の意味においてであるか、それとも條件つきであるか、若しまた滿足してゐなかつたとしたら、それをどう詮めてゐたか、それともどう打開しようとしてゐたか、といふやうなことがそれから探り出されるわけであります。

このやうなわけで、或る時代の、人々の興味の動きといふものは、その時代の政治組織・經濟組織に對する、一つの、批判の形を取らぬ批判としてあらはれるものでありまして、批判としてはまことにとりとめのない、積極的でもなければ消極的でもない、また肯定ともつかなければ否定ともつかない、甚だ曖昧なものではありますが、それだけに何とも取締りやうのないこちらを押へればあちらへ逃げる、そちらを押へればまたこちらへ身をかはすといふ、まことに始末の惡いもので、どんな强い力を以てしても、これを徹底的に押しつぶしてしまふことは出來ないのであります。

そこで、この時代々々によつて違ふ興味のあり方といふものを、その時代々々の政治組織や經濟組織と結びつけて見ますと、そこではじめてその時代々々における、人々の生き方の本當の姿が知られるわけであります。よそゆきでも表向きでもない、ありのまゝの姿が、そこに見られるわけであります。善くても、惡くても、それが私どもの祖先の僞らぬ姿なのであります

この時代々々によつて違ふ興味のあり方といふものを取り上げたものが、とりもなほさず文學であつて、それもすぐれた文學になればなるほど、時代の中心興味となるものを巧みに取り上げてゐるのであつて、それだけに一世から取り囃されるといふわけにもなるのであります。それも別に、作者や讀者によつて、何故そんなものに興味が引かれるかといふことが、明らかにまた十分に自覺せられてゐなくてもかまひません。もちろん自覺せられてゐることに越したことはありませんが、それがなくても、ちやんと時代の中心興味となるものがつかまへられてゐればそれで結構なのです。私どもは、それで十分私どもの目的を達することが出來るのです

ともかく私どもは、時代の中心興味がどこへ向けられてゐるか、またどんな風に向けられてゐるか、といふことを、その時代の文學作品を通じて、始めて知ることが出來るのでありまし

て、それからして、時代の人々の生き方がどんなものであつたかといふことを、如實に窺ひ知ることが出來るのであります。そしてこのことは、それ以外のものによつたのでは、――例へば、歴史を讀むとか、法律を調べるとか、その他さま〳〵の記錄類をあさるとかしただけでは十分とはいへないので、もちろんそこから重要な參考資料は引き出せるにしても、文學によるほど、直接な、周到な、また廣範圍に亙る展望は、他に求めることが出來ないのであります。

では、さういふ風にして、過去の或る時代における人々の眞實の、ありのまゝの生き方を知ることが、一體何の役に立つのかといへば、それは申すまでもなく、私どもの今日及び將來の生き方を決定する上に、この上もない好參考となるからであります。私どもに取つて、今日及び將來の生活を、どのやうに向上發展せしむべきか、といふ問題は、他の何物にもまさる重大問題であります。この問題に思ひをひそめて、大なり小なり自分々々の持場で、應分の努力をしない生涯といふものは、決して値打のある生涯といふわけには參りません。人間と生れた以上、何は措いてもこの問題は、常に懸案として、念頭に留めて置かなければならないものです

そこでまづ私どもは、現在私どもの生きてゐる社會が、どんな狀態にあるか、またどんな方

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertong